

傷病者とのコミュニケーション

〔第12回〕「事例集」最終回

講師 鈴木 勇二 (根室市消防本部)

1. はじめに

根室市消防本部の鈴木勇二と申します。シリーズ最終回「事例集」を担当します。よろしくお願いいたします。

今までにさまざまなコミュニケーションの方法が掲載されてきました。この最終回では実際に自分が経験した事例や職場の同僚が経験した事例を基に、どのようにコミュニケーションをとれば良かったのか、または、参考となるコミュニケーションのとりかたなどを振り返りたいと思います。

2. 乳児編

「7か月の男の子が、居間で息をしていない」との通報により、1名増員し4名で現場に向かいました。家の前には子供用の自転車が2～3台あり、兄弟がいるんだなーと考えながら玄関に入りました。玄関には子供用の靴が散乱



写真1 玄関には子供用の靴が散乱

していました(写真1)。

玄関の入口から丁度まっすぐに廊下が伸び、その中間に明かりが見えました。お父さんと思われる男性が、出てきて、「早く！ 早く！」と我々を呼ぶ姿(写真2)が確認できました。

直ぐに廊下を駆け上がり男性の後を行きますと、うつ伏せのまま、ピクリとも動かない男の子(写真3)を確認しました。



写真2 「早く！早く！」



写真3 うつ伏せのまま動かない男の子

その部屋には、兄弟が2～3名おり、男の子を心配そうに伺っていました。直ちに観察をしますと、意識なし、呼吸なし、上腕動脈も脈拍はありませんでした。心肺蘇生法を行い、状況をお父さんに聞きますと、母親じゃないと分からないと言うのです。それでは、「お母さんは？」と聞きますと、お父さんが奥の部屋からお母さんを連れてきました(写真4)。



写真4 奥の部屋から母親を連れてきた

お母さんは、「私はきちんと面倒をみていた。振り向いたら動かなかった」と言うのです。

心肺蘇生法をしながら、隊員に搬送準備を指示し、もう一度お母さんに「我々は、お母さんを責めているのではないですよ！ この子を助けたいのです、詳しいことを教えてほしい」と説明しました。すると、「実は、下の息子が寝たので、買い物に行っている間、兄弟に見てもらっていたの。帰ってきたら息をしていなかった」と教えてくれたのです。「どうしていいか分からず、お父さんに出先から戻ってきてもらい、お父さんに119番してもらった」と言うことでした。その内容を聞き、直ちに搬送しましたが、病院で死亡が確認されました。

小さな子供でしたので、何とか救いたいと出場した隊員全員が願いながら搬送しました。この現場では、母親が自分を責めるあまり、救急隊に対して、当初強い口調で向かってくるような態度でしたが、救急隊は最善を尽くして搬送しますと、毅然とした態度で説明を行うことにより、しっかりとした内容を把握することができました。

3. 小児編

「1歳の女の子が熱を40度出し、痙攣をおこしている」との通報内容で出場しました。

通報内容は、火事を連想させるくらいの勢いで、家族のあせりや不安が手にとるようにわかる内容でした。現場に到着しますと、アパートの玄関が少し開き、何やら泣き叫んでいる母親らしき声が聞こえてきました。

玄関に入りますと、女性ものの靴と子供の靴が何足か並び、男性ものの靴は見当たりません。母子家庭なのかな？とこえつつ、退路を考慮しながら、「救急隊です、〇〇さんのお宅ですか？」との問いかけに「助けてください！こっちです」との声が返ってきました。居間に入ると、小さな布団にぐったりとしてすやすや寝ている女の子(写真5)と、涙を浮かべてこちらを見る母親らしき女性(写真6)が見えてきました。



写真5 すやすや寝ている女の子



写真6 涙を浮かべてこちらを見る母親

母親に状況を聞こうとしても、取り乱してなかなか上手く話せません(写真7)。隊員に指示して、パルスオキシメーターを装着しようとしたとき(写真8)、女の子が目を開け泣き始めました。女の子はマスクをして入ってきた、3人の大男にびっくりして泣き始めたのです。



写真7 取り乱してなかなか上手に話せない



写真8 パルスオキシメーターを付けると泣き始めた

困り果てた我々は、母親に「女の子を抱っこして救急車まで行けますか」と話しますと、今まで取り乱していた母親が、正気に戻り、しっかりとした口調で「大丈夫です」と言ってくれました(写真9)。救急車に入ってから、痙攣の時間や様子を聞き、泣き叫ぶ女の子には、母親に直接体温測定やパルスオキシメーターのプロブを装着してもらい(写真10)、無事に搬送することができました。

小さい子供の救急現場では、特に母親が一番大事な役割を持ち、子供の普段の状態や経緯など詳しく把握している